保健協力員活動の活性化に関する調査

千葉敦子[1)]、大西基喜[1)]、石田賢哉[1)]、メリッサ小笠原[1)]、
澤谷悦子[2)]、梅庭牧子[2)]、奥村智子[3)]

1）青森県立保健大学、2）青森県国民健康保険団体連合会、3）青森県健康福祉部

Key Words　①保健協力員　②活動活性化　③活動満足感　④活動負担感

Ⅰ．はじめに

青森県は平均寿命が全国で最も低く、特に壮年期男性の早世が課題となっている。このような現状をふまえ、県では、青森県健康増進計画「健康あおもり２１（第２次)」を策定し、県民のヘルスリテラシーの向上を目標に掲げ、短命県返上へ向けて健康増進活動を推進しているところである。地域には健康増進のための住民組織がいくつかあるが、そのうちの一つに「保健協力員」がある。保健協力員は、地域によって名称が異なり、保健補導員や保健推進員等と呼ばれているものの、いずれも市町村長の委嘱を受けて活動する地域の住民組織集団である。青森県では短命県返上に向けて保健協力員の活動が期待されている。しかし、保健協力員は担い手不足による固定化や高齢化が課題とされており、活動の活性化に向けた方策が求められている。

そこで、本研究では、青森県健康福祉部と青森県国民健康保険団体連合会と連携し、県内全市町村の保健協力員全員に対してアンケート調査を実施し、現状と課題を明らかにすることとした。

Ⅱ．目的

本研究の目的は、県民のヘルスリテラシーの向上および短命県返上に寄与することをめざし、保健協力員活動の活性化策の示唆を得るために、青森県内の全市町村の保健協力員全員に対して、活動満足感・負担感を調査し、現状と課題を明らかにすることである。

Ⅲ．研究の経過

2018 年 7 月～12 月に、無記名自記式質問紙を用いた横断研究を実施した。対象は A 県内全市町村の保健協力員全員（5,414 人）であり、質問紙は各市町村から対象者に配布し、回収は返信用封筒にて研究者が行った。調査項目は、村山らの活動満足感・負担感尺度 24 項目にオリジナルの 5 項目を加えた 29 項目、石川らが開発したヘルスリテラシー尺度、生活習慣行動、ソーシャルキャピタル、基本属性、保健協力員をしていてよかったことについての自由記述とした。活動満足感は「地域愛着」、「自己利益」の 2 つの下位尺度からなり、活動負担感は「活動量負担」、「精神的負担」、「日常生活負担」の 3 つの下位尺度から構成されている。本研究は、所属機関研究倫理委員会の承認（承認番号 1753）を得て実施し、対象者には、研究の目的、意義、倫理的配慮等を記述した依頼文書を配布し、回答をもって同意を得たこととした。

回答者は 2,441 人（回収率 45.1%）で、回答に不備のあるものを除いた有効回答者は

2,422 人（有効回答率 44.7%）であった。現在は、記述統計を全体および保健所ごと、市町村ごとに整理し、報告書作成の準備をしている段階である。

本報では、保健協力員が認知する活動メリットについての分析結果を報告する。

【A 県保健協力員が認知する活動メリットに関する検討】

１．対象

保健協力員をしていてよかったことについて自由記述形式で回答を求め、有効回答者 2,422 人のうち､メリットに関する自由記述の記載があった者 1,437 人を分析対象とした。

２．分析方法

活動メリットに関して、一文が一つの内容になるようにデータをそろえコード化し、内容の類似性に基づいて抽象度・表現をそろえながらカテゴリー化を行い、コード数をカウントした。

Ⅳ．結果

回答者の年齢は、60 歳以上が 1,867 人（77.1%）であり、性別は男性 93 人（3.8%）、女性 2,326 人（96.2%）であった。経験年数は 5 年以上が 1,290 人（53.7%）であった。地域で保健協力員以外の役割があると回答した人は 1,364 人（57.0%）、なしが 1,029 人（43.0%）であった。

活動メリットに関して自由記述に記載があった者 1,437 人から、1,639 のコードが得られた。これらは 11 のカテゴリーと 58 のサブカテゴリーに分類された。

カテゴリーは【地域住民や保健協力員との出会いや会話が増えネットワークが豊かになる】がコード数 555（33.3%）で最も多く、【研修会や交流会等から健康に関する知識やいろいろな情報を得ることができ学びになる】同 333（20.3%）、【地域で活動することに価値を見出したり人の役に立つことに喜びを感じることができる】同 241（14.7%）、【保健協力員の活動をきっかけに健診を受けるようになったり健康に気をつけようと思ったりするなど自分や家族の健康づくりに役立つ】同 239（14.6%）、【積極性が増す・前向きになるなど自己の成長につながる】同 77（4.7%）と続いた。【特にない・わからない】は同 89（5.4%）、【負担に感じる・やりたくない】は同 30（1.8%）であった。

Ⅴ．考察

無回答やネガティブ意見を除いても約半数の回答者は保健協力員活動のメリットを認知していることがわかった。カテゴリーに命名された、「活動価値の見い出し」、「役に立つことでの喜び」、「自己の成長」などはマズローの承認や自己実現といった上位の欲求であり、保健協力員活動は極めて尊い経験になりうることが示された。よって、これらのメリットを内外に周知することで担い手不足の解消や活性化策につながる可能性があることが示唆された。

今後は、保健協力員の活動満足感と負担感の現状を把握し、その影響要因を分析する予定である。

＊連絡先：〒030-8505　青森市浜館間瀬 58-1　E-mail: a_chiba@auhw.ac.jp